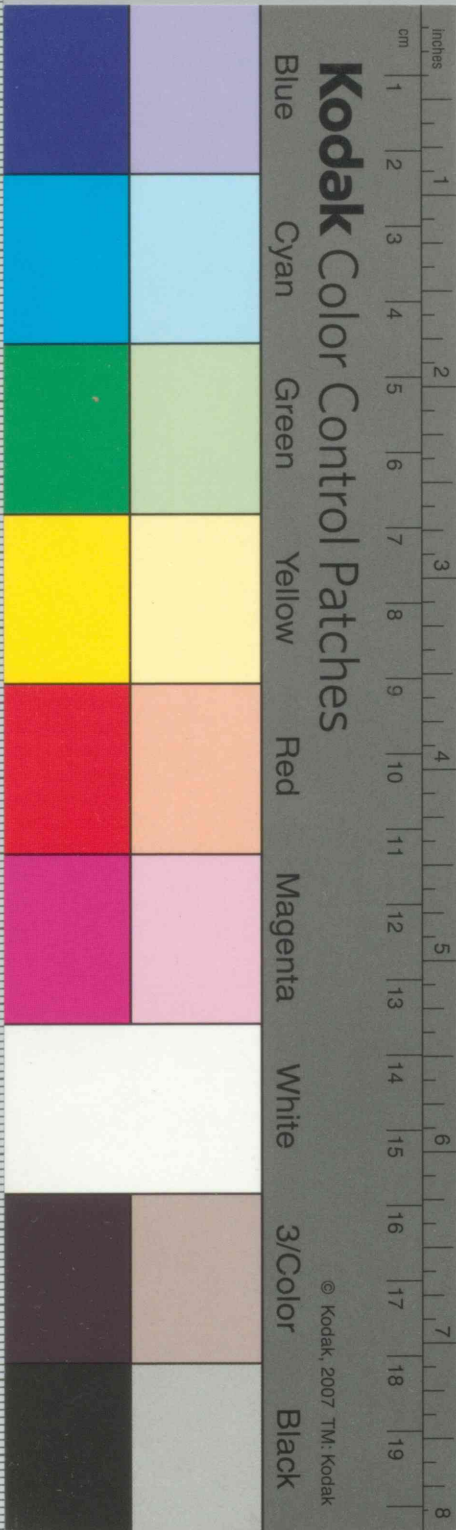


訂五女子國語讀本

卷五

4b
810
大11



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42165

教科書文庫

4
810
42-1922
20000 67982

46
810
大11

日八廿月一年一十正大
審定檢省部文
書科教科語國校學女等高

訂五 女子國語讀本 卷五

吉田彌平 篠田利英 共編
小島政吉 岡田正美

東京 金港堂書籍株式會社



訂五 女子國語讀本 卷五

目次

一	明治神宮……………	一
二	十二徳（昭憲皇太后御歌）……………	二〇
三	春宵……………	二五
四	峠の茶屋……………	二六
五	戦時の巴里……………	三三
六	鍵の室障子の家……………	三三
七	ことばづかひ……………	三三
八	徳川光友の室……………	三七

資料室

目次

九	時間……………	四
一〇	修善寺より……………	尾崎紅葉 四
一一	十國峠の眺望……………	高山樗牛 五
一二	筆の歌……………	武島羽衣 五
一三	マゼソン夫人……………	下田歌子 五
一四	樂地……………	幸田露伴 六
一五	おまんの方……………	…………… 六
一六	黒井繁乃……………	…………… 六
一七	江津川……………	徳富健次郎 六
一八	水の力……………	幸田露伴 六
一九	蒲の花がたみ……………	瀧澤馬琴 六

二〇	天下第一の義舉……………	蒲生君平 七
二一	川どめ……………	…………… 七
二二	香港……………	水野廣徳 七
二三	金字塔……………	久保勘三郎 七
二四	九月十三日の夜……………	芳賀矢一 七
二五	禁庭の野分(昭憲皇太后御作)……………	…………… 七
二六	空行く雁……………	曾我物語 七
二七	月山……………	田山花袋 七
二八	月光の曲……………	…………… 七

訂五 女子國語讀本卷五 目次終

訂五 女子國語讀本卷五

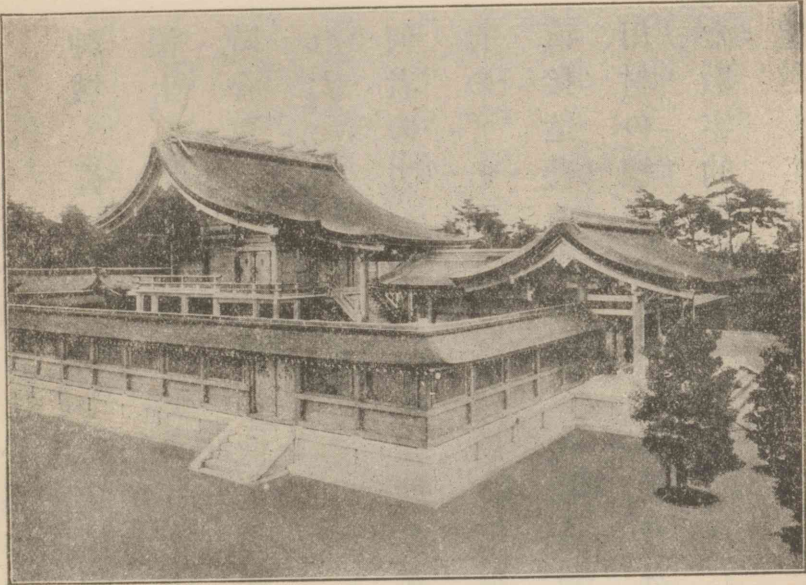
一 明治神宮

快美な色彩の反射と和らかい感觸とを持つた日の光に包まれた代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら幾度其處を通つたらう。森の中からは時として石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が快い調子を作つて流れて出た。或時は無數の蟻の集團が大きな餌物を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多

數の人夫が汗みづくになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見た事もあつた。

あの中に明治神宮が建つのだとさう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生の親の墓に對するやうな強い懐かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々抄取つて基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つて行くのが堪らない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮が到頭竣工を告げた。曾て赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾箇も列んで、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今すがくしい色の小砂利を敷詰



明治神宮御本殿

めた。參道の白い線が常緑の森の中に長く續き、其の以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見えた御料地は、いつの間にかやたら全く見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、所謂流造素木の神殿の隠顯して見えるのが、何

とも言へない神々しい感じを起させる、
神域 眞に神の在しますに適した莊嚴と靜寂と幽雅との
領土。私は始めて此の完全した明治神宮の神苑に立つた
時、今更のやうに其の改つた光景を觀て、強烈な感激に打た
れた。

何者の力。何者の力が此の新らしい建設の事業を完成し
たのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月以來、
直接造營の事に當つた延人員が約百何十萬人であるとか、
用材の總計が尺一萬九千本であるとか云ふやうな細密
な數字的計算を擧げて書いてあるが、さう云ふ數字を高く
超越して、隠れた部面に働いた強い力こそ實に此の明治神

宮の基礎を千歳不動の固さに築いたものであつて、限りも
無く高い明治天皇の御聖徳とはてしなく深い昭憲皇太后
の御仁徳、そして此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の
至純な感謝の心、これが陰に陽に工程の進歩を刺戟して遂
に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力
である事は、何者も否むことの出来ない事實である。

嗚呼至純至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、何百里の
遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木、それが何
を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一本の
樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く皆國民の燃えるや
うな熱誠が籠つて居るのである。斯くて殆ど全く國民の

誠意を以て、造り成し奉つた其の宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后御二柱の神靈が宿らせ給ふのである。何と云ふ美しい尊い事實だらう。

今までの神社に曾て見た事のない明治神宮独自の特色は實に此に在るのである。私は表參道を直路神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遙に神域の中を拜した刹那に、先づ此の事を直感した。そして一步步美しい小砂利の上を神殿に近く蹈入るに随つて、愈、肅然たる心持に成つて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には、盡きること知らない密林が、何處までも長く續いて、行くに随つて、それが段々濃く成つて行つて居る。御鳥居から一町許奥へ入つて、神橋へ來ると、何處からとも無く清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、橋下は溪流の趣を摸した風致の好い小流で、筑波山の國有林から移した自然石の据ゑられた處、淺野侯爵家の寄附に係る數十株の楓は、その影を水面に落して美しい趣を成して居る。此處は神苑中獨り人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが繊細な技巧を排した自然的大觀を呈して居る中に、特殊の庭園趣味を發揮して居るのである。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木に成つてゐて、其の左側の並木が斷えた處に樹齡千七百四十年を重ねて居たと云

ふ直立六丈餘の臺灣産の檜の太木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達すると聞いた。

此の鳥居の在る所は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ヶ谷口から來て居る幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば道は更に十間の幅員に擴大して、西を指す事百五十間、其の道の盡きた所で右を見ると、ぱつと眼界は急に廣く且明るく成つて、一町の北方に亭亭として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪の如き神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて其の總坪數

六百五十坪、本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造つたもので、近く拜殿に上つて拜すると、芳ばしい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の窺ふことを許されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねども、

かたじけなきに涙こぼるゝ。

私は默禱を終ると始めて向ふを仰ぎ見た。

明るい社殿。何と云ふ明るい快い感じを持つた社殿だらう。今までに見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い

光波の中に靜寂な、併し陰慘な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所のない心持で十分な光線に總てを解放し、總てを暴露して見せてゐる。然もそれでゐて決して淺露な心持はせず、却て一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威壓の力が迫り寄るのを覺えるのであつた。(明治神宮記に據る)

二 十二德 (昭憲皇太后御歌)

節制

花はけつそむがの秋はさうづさも

ほどくよそくまほほれ

清潔

まろくのれはらうはをくども

うさねいのもりなりなり

勤勞

みづがずは玉のひりりいづごらん

人ねんもかきそあるらま

沈黙

まじぎに たちハ 木よばざうなりからそあれ
ことばもあはたちらささげらん

確志

人ごころからまじうばまらるまの
またち方ハ 大よもやれざうなり

誠實

とうぐまほさるいごの花もあれど
ふほふこころぬるはきりな

溫和

ニ たちづきををりば 木きりて花ざくら
またちまじほごをならひてくれ

謹遊

たち ちづきををりて ゆれぬの
ひくきまほくをこころも

順序

ちづきみちもきけんものごとれ
本末をぶらちづきざりては

節候

ふれつゝのほごよきふとふふすは

ま奈のほゆもふれざらぬ

寧靜

いりまきこ身はくぐくともむらさきの

こころはゆふとあるづらけり

ろ義

ふゆふみをすくはん道もちりきより

たけおぼろんをささるひよ

*著述家。
落花と號す。

三 春宵

徳富健次郎

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢にあり。白雲團々、月に近
きは銀の如く光り、遠きは綿の如くやはらかなり。春星影
よりも微かに空に綴らる。微茫たる月色、花に映じて、密な
る枝は月を鎖してほの暗く、疎なる一枝は月にさし出でて
ほの白く、風情言ひつくし難し。薄き影と薄き光とは、落花
點々たる庭に落ちて、地を歩むに、さながら天を歩む感あり。
濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらんに俚歌
を唱ふ聲あり。

已にして雨はらくと降來ぬ。やがてまた止みぬ。春雲
月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からんとす。蛙の

聲いと静かなり。(自然と人生)

*名は金之助。文學者、小説家。大正五年歿す。

峠の茶屋

夏目漱石

おいと聲を掛けたが、返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。おいと復聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騒

ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜にかけてある。幸、下は焚きつけてある。



夏目漱石

返事がないから、無斷ですつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。

障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるら

しい。

床几の上には一升枿程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が日の移るの知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がざらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つ

てゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りてござんしよ。おゝ、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し焚付けてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ／＼と二聲で雞を追下げる。こここゝと駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を

踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられて居る。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、——先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の中がぱち／＼と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嗚御寒かる。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微かな痕をまだ板底にからんで居る。(鶉籠)

名は春樹
文學者。

五 戦時の巴里

島崎藤村

昨日は十七八歳ばかりの青年の一群に町で出遇ひました。それらの青年は皆學生でした。普通の服に革帶を締め、腕章を着け、脚絆を巻きつけ、銃を肩にし、列を作つて、兵式の訓練を受けるために公園の方へ行くのでした。中にはまだ若々しい聰明な面ざしのものをも見かけました。彼等はいづれ國難に赴かうとして居る若者達でせう。自分等のことにしたら、短い袴を着けて友達と一緒に學校へ通つて居た年頃だ。さう思つて、しばらく其の群を見送りながら立つて居ました。此の節は、青年期に達したばかりと見えて身體もまだ十分に發育して居ないやうな若い兵士をもよく町で見かけます。

開戦以來、はや七箇月を経ました。動員當時の混雜、市民の狼狽、あの頃の騒を思ふと、自制に自制を重ねて此の非常な時局に處して來た佛蘭西人も、随分努めたものと言はねばなりません。私は佛蘭西人の精力の發現が寧ろさういふ方面にあるといふに躊躇しません。動員令が下ると共に大統領が巴里市民に與へた諭告は、徹頭徹尾市民に抑制を説勧めたものでした。シヨツフル將軍の公報は佛蘭西一流の多辯でなく、どこまでも謙遜に、所謂東洋的簡潔に書いてあります。昨年八月以來、當地の新聞は殆ど戦争の記事で埋めてある有様ではありますが、ごく通俗を旨とした新聞にさへ、實際あまり挑發的な文字が用ひてありません。

佛國の西南部、
西班牙に近く、
大西洋の産地、
葡萄酒の産地、
大正三年獨逸の
兵禍をさげす
す。都をこけて遷
佛國の首相。

昨年の冬、巴里市民がポルドーから再びポアンカレー氏をこの都に迎へた時でさへ、町々は平日とかはりませんでした。日本の赤十字隊も無事當地へ着きました。佛蘭西政府の當局者はその病院に巴里第一流のホテルをあて、紅い日の丸の旗をエトワールの凱旋門に近き好位置に懸させるほどの款待を盡しましたが、派手な歓迎騒などは、遠慮したやうです。見るもの聞くものがかういふ調子です。痛々しいほど沈んで、そしてしんみりとして居ます。戦争が長引けば長引くだけ、ますます私の身に感じて來たのは、この抑へに抑へようとして居るエナージイです、佛蘭西人の消極的な勇氣であります。

* 巴里市にある
古き大學、1209
年頃創立。

只今の巴里は、言はず留守の都です。佛蘭西政府もポルドーよりかへり、各劇場でもマチネーを興行するやうになり、寄席やユーヒー店まで開かれて居ると言へば、以前と同じ巴里を想像させますが、其の實、巴里見物の爲に諸國から集つて來る多數の外國人を相手にした頃の歡樂の都ではありません。しかし、純粹な巴里の味は今が、却て味はれる様です。羅馬舊教的のしつとりとした空氣が其處にも此處にも溢れて居ます。劇の興行にしても、愛國的精神に富んだ出し物を選び、佛蘭西の古今の詩人の作つた多くの詩篇を、名のある俳優が舞臺の上で朗吟し、最後に國歌を歌つて幕を閉ぢるといふしつとりとした行方です。ソルボンヌ

*佛蘭西の歴史
書家
1821-1893

の大講堂は正面にシ^{*}ャヴァンヌの壁畫が描いてあり、半楕圓形の磨硝子の天井、昔風の建築、總てが古雅で、心持好く出来て居りますが、毎週の日曜日には、そこで國民マチネといふ恤兵的の音樂會があります。佛蘭西の藝術家が祖國に對する事業として開催するのです。私も二度ほどその大講堂へ聽きに行つて見ました。有名な女優の獨吟があり、學士の朗讀があり、管絃樂の合奏があり、最後に一同で佛蘭西國歌を歌ひました。戦時らしい活氣は外部よりも内面に潜んで居て、却てさういふ音樂會などに溢れて居るやうに思はれました。(戦争と巴里)

六 鍵の室障子の家

河上肇

經濟學者。
法學博士。
京都帝國大學教授。
白耳義の首府。

「西洋人の生活を何かに纏めて、掌の上に載せて見せよ。」と注文されるならば、私は鍵を出して示さうと思ふ。始めてブリュッセルの素人下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて部屋に入ると、其の戸を内から閉ぢる錠がある。北側に窓があつて其の窓にも亦錠がある。一度此等の錠を下したならば、誰も部屋の中に入つて來られぬことになつて居る。此等の錠を見て、道理から云へば、私は安心せねばならぬのであらうが、實際は寧ろ軽い不安と淺い危懼とに襲はれた。戸棚がある、勿論戸に錠があり、抽斗に錠がある。洗面臺の

下に四段の抽斗がある、一々それに錠が拵へてある。机に抽斗がある、それにも亦錠が拵へてある。凡そ開閉の出来るものに、特別に錠の装置のないものは全くないのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には、必ず錠を出して錠を外さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、其の大戸に内から錠を下す。錠がなくては外からは如何にしても開かぬ戸であるが、猶用心の爲に更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は外から錠を入れて、一回半廻さぬと戸は開かぬ。錠の生活に慣れぬ私は此の大戸の錠の用法に就いて容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿の某君は嘗て錠を忘れて、遂に一夜をホテルで過したことがあつたと云ふ。

巴里に来て、始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉ぢると、錠がなければ、外からは開けられぬ。それなのに内から又錠をおろす爲に、別の錠が備へつけてあつた。西洋は個人主義の國である。それ故、厚い煉瓦の壁で部屋を圍み、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、籠居する時は、外からどうしても窺ふことが出来ぬやうにしてある。如何に親しい間柄の者でも、他人の室に入るには、まづ戸をたたく。すると、内に居る人が「這入れ。」と應じる。其の聲を聞くまでは、今呼んだ下女も、決して其の戸を開けないのである。

日本は家族主義の國である。そして、日本の家族主義が、西洋の個人主義と甚だしく差異がある如く、日本人の住居の様子は、甚だしく西洋人のと相違して居る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一重の障子で部屋を圍んで居る、出入自由である、共同主義である。たとひ、一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間・六間乃至十間の室が、離れるやうで、即くやうで、茫然・漠然と自ら一家を成して居るのが日本の家である。此の家は實に日本獨得のものである。夫婦を始め家族一般、相寄り相信じて一體を作し、其の間に一點の祕密をも存せぬ所が、日本の家族と云ふものゝ精神である。

此の精神を建築で現せば、即ち日本流の家屋になる。錠をおろした戸の代りに紙で貼つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し、例へば巴里の真中に、そんな家を造つても、之に住まひ得る巴里人が居ない。西洋人は室を有つて居る。併し、西洋には家がない。家を有つて居るものは、今日の世界文明國中、日本人だけである。

(祖國を顧みて)

セ ことばづかひ

「和歌こそ猶をかしきものなれ。あやしの賤山がつの所作も、言ひ出づれば面白く、恐ろしきものしゝも臥猪の床とい

へば優しくなりぬ。」と兼好法師は書きたり。げに一つ物にても、かたつむり」といへば優しく聞え、てゝむし」といへば滑稽に思はる。同じ事にても、露が垂る。」といへば美しく、汗が出る。」といへば汚なげなり。「某の人は活潑なり。」といへば快く聞え、おてんばなり。」といへば聞き憎し。されば和歌のみならず、平日の言語・文章皆詞づかひによりて優美にもなり、粗野にもなり、人の心を愉快にもし、不快にもするなり。交際家などが、「一粒えりの辭を使ふ。」といふことは屢聞く所なり。されど其の時に臨みては一粒づつ選ぶ暇なかるべければ、平生より心がけて修練しておくこと必要なるべし。

詞遣ひは上品なるべし。上品とは氣取ることに非ず、むづかしき詞を遣ふことに非ず、教育あり修養ある先輩に倣ひて、純良なる日本語を體得し、務めて野卑なる詞を去るにあり。例へば、今の青年女子の間に流行する「有つてよ。」無くてよ。」といふてよ式の詞は、打解けて愛すべき態なきに非ざれど、未だ社交上の詞として上品なるものにはあらざるべし。「すてき」といふ語は純然たる男子語の而も上品ならざるものなるに、いつしか妙齡の女子も之を用ひんとせるは、心ある人の痛く擧蹙する所なり。田舎詞なりとて必ずしも下品なるに非ず。古語は田舎にありとは國學者の常に言ふ所なり。普通の口語に「落ちる」

「捨てる」といふを、九州にては「落つる」「捨つる」と言ふ處多し。これ古き語なり。東北にて「何ちふ物」などいふ「ちふ」も古語なり。されども國語は統一する必要ある故、常に帝都の語を標準とし、随つて吾等は東京語を標準とす。反對に東京語は往々地方語を混入し、互に平均する傾あり。

漢語・洋語を多く用ふるは斟酌すべしと雖も、學術上に「引力」「習慣性」などの漢語を使ふは已むを得ざることなり。青年學生の相會して「痛快」「猛烈」などの語を連發するは自ら別事なり。學友間には練習のため特に外國語を語ることあらん。是等の場合を除きては、妄りに漢洋語を多く列ぬるは、男子にても「知つたぶりの非難を免れ難く、殊に溫良の人品

を害し、時としては一座の不快を招くことあり。

詞は間接に婉曲に言ひ廻すかた味ある場合多し。「わるい事」といふべきを「よくない事」といひ、「嫌ふ」を「好まぬ」といふが如きは詞に餘裕ありて聞きよし。京畿地方にて「参ります」といはずして「よせて戴きます」といふはこの類なるべくや。日本にては敬語の用ひ方甚だむづかし。例へば物なれぬ人は吾に屬すべき卑下の詞「参る」「申す」「致す」等を敬稱と混じて他人に用ひ、あなたも参りましたか。などいふことあり。或は敬語を多く用ひ過ぐることもあり、落語家は極端の例を以て「御座り奉る」など云へり。高貴の人に對しては、新聞紙などにも兎角此の誤多し。令旨・行啓・還御などの語は平人

に用ひざるものにして、其の儘己に敬語なるを、更に敬稱して御令旨・御還御などいふはまた此の類なり。是等の事は皆詞遣ひの技巧に關する者なり。其の他情に關する者にして更に大切なるものあり。老人の前には老衰を語らず、病人の前には重病を語らず、或は容色・衣服・財産等何事に就きても、注意して對手の心にかくべき事を避くるは、皆紳士・淑女の高尙なる同情なり。昔在原行平卿は文學・政治の器量一世に秀でたる人なりしが、光孝天皇の芹川（三）の行幸に供奉し、豫ねて其の翌日辭職退隱せん志ありければ、狩衣に鶴の繪を刺繡せしめて老後の姿をなし、

（二） 寛平五年歿す。

（三） 山城國葛野郡に在り。小倉山より出て、桂川に注ぐ。仁孝天皇十二年二月、光孝天皇行幸したまふ。

翁さび人などがめそ狩衣、

今日ばかりとぞたづも鳴くなる。

と書付けしに、生憎に天皇も御老年にまし／＼ければ、御氣色宜しからずして、御遊の興も醒めたりとかや。

ハ 徳川光友の室

上

長局の方俄かに物騒がし。「あれよく」と叫ぶ聲、ばたと走る音。たゞ事ならずとおぼゆ。夫人は居室に在り。悠然として騒がず、徐に侍女に命じぬ。五條を召せ。

*尾張の國主。元祿六年歿す。

老女五條は召に應じて來れり。顔色青ざめ、呼吸忙し。何事ぞ。

夫人の言葉未だ畢らず、五條は早くも口を開けり。

一大事の候。只今、中山茂兵衛、奥女中を刺殺し、血刀を提げて部屋々々を騒がし候。あれく、あのやうに騒ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。早々御動座遊ばさるべし。

夫人はきつと五條の顔を見遣りぬ。

それしきの事、なに一大事と云ふべきぞ。茂兵衛は亂心せりとこそ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎖むべければ、構へて騒ぐべからず。そこに居よ。何の周章つる事

かある。

夫人は端然として座をも動かさず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち己みぬ。

中

一年は夢の如くに過ぎぬ。

去年の今日は茂兵衛の奥女中を殺し、日に候はずや。

あの時の恐ろしき、今に忘れ候はず。

侍女等次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄一天俄かに搔曇れり。風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。天色黯澹として、晝なほ夜の如し。

侍女等は顛ひ戦きぬ。夫人は平然として常の如し。忽然

として火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷の落ちけるなり。侍女或は倒れ、或は氣絶す。夫人は自若として神色平生の如し。

下

人はこゝに投じ、雷はこゝに落つ。

不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、此の邸、此の庭、亦皆

不祥として改むべきにあらずや。井戸は底を浚へ水を替ふれば、子細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて、何の益もなき事ぞかし。金兵衛其の理に服しぬ。埋井の議乃ち止みぬ。夫人の言ふ所理義極めて明白、人をして争ふ辭なからしむ。識見雋邁なるにあらずんば、能はじ。賢夫人と謂ふべし。(報知新聞)

九 時間

ナポレオンは最も善く時間の大切なるを知れる人なり。その比類なき大功を奏したるも、多くは時間の使用その妙を極めしがためなり。嘗て奥地利軍の敗北を嗤つて曰く、

*西曆一八一五年六月十八日。

「かれらは五分時間の價幾何なるを知らざるがために敗れたるなり。」と。この時間の英雄ナポレオンもワーテルローの大戦に於て、自ら時を誤りたると部將グルーシーの遅参したるとによりて、一敗地に塗れ了んぬ。
「思ひ立つ日が吉日。」とは成功の秘訣を教へたる名言なり。思ひ立つやいなや直ちにその事に取りかゝれば、興味涌くがごとく、わが身の勤勞に服しをるを忘れて、たゞ快樂を取りをるを覺ゆるのみ、従つて、事業の進行も自ら速かなり。もし思ひ立つ日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、他日これを始むるに非常の困難と痛苦とを感ずるのみならず、成功の一段に至つても、即時に着手したるに劣

(二)ギリシヤの哲學者。紀元前五百年頃の人物。

(三)英國の航海家。(1582-1618)

ることあるを免れず。故に、某大商店のごときは規則を設けて、郵書は即日返答すべし。」と定めたりといふ。事をなすは種子を蒔くがごとし、一度その時を失ひては、終にこれをなす能はざるなり。ヘラクリトス曰く、汝は同じ河水を以て再び沐浴することを得ず。」と。これ、河水は流れて息まらず、時は往いて還らず、大事も興味も元氣も熱心も一度去つては復得べからざるをいふなり。
ウオルター・ローリーは僅少の時間を以て多くの事を成したる人なり。その術を問へば、即ち曰く、「何事にも、なさねばならぬことは、直ちに之をなすにあり。」と。あゝ、これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ。多く

明^(二)日ありとおもふ心のあた櫻^(一)よはに嵐の吹^(三)ぬもの^(四)は

はこれ明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐に吹拂はれて、茫然自失せるものにあらざるはなし。鐵は熱せられてなほ紅きうちに打つべし、枯草は太陽の輝きをる間に乾かすべし、事は時機を失はずして始むべし。古より大人と呼ばれ豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰を惜みて機會を捉へし人なり。

米國の大統領。^(三)
(1792—1799)

米國の政治家。^(四)
(1706—1790)

時を誤るものは責任を誤るものなり、斷じて世間の信用を受くることなし。ウオシントンの書記、一日遅刻せり。辯疏するに、己が時計の後れをりしを以てす。ウオシントン直ちに告げて曰く、汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば、余は他の書記を備ふべきのみ。フランクリン常に遅

英國の提督。^{*}
(1768—1835)

刻勝なる奴僕を嗤つて曰く、善く辯解する人は何にも役に立たぬ人なり。と。ホルソン、或時、軍艦に乗らんとす。その前夜、御者來りて、明朝正六時に馬車をまはし申すべし。といふや、彼は曰く、それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは、余が余たる所以なり。と。ナポレオン、一夕、諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將なほ來らざりければ、彼は一人にて食事を始めたり。將に食卓を離れんとせしときに、諸將漸く來りしかば、彼點頭して曰く、諸君、己に食事は濟みたり。請ふ、各自の職務に服せん。と。凡そ、時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立つる基なり。(立身策に據る)

名は徳太郎。文學者。明治三十六年歿す。

桂川の向。

10 修善寺より

尾崎紅葉

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘撃して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。「時政翁の邪慳何ぞ今に執着して假さゞることかくのごとさや。」と見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍の顯榮にもものぼりたまひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にかおはしけん、と低回去るに忍びかね候。墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津

源絶頼。



尾崎紅葉

城にして、現在の五輪塔は、後人の御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲冠者の墳は未だ弔はず、直隣に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終

桂川の川中に涌
出づ。

夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷トクコの湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀬に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に着物



湯の鈷獨寺善修

を脱ぎはなしなど、始終ピント安を妨害致候爲、技師の難澁これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども、印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下なる馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢これに道を讓るべく餘儀無くせらるゝため、空徳の間に速寫機を拵りて立退き申候。

此の寫眞修行の前、人の需によりて少々麁筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り

候に、居然たる檀紙金砂子の好短冊を得候こそ風流この上なく、感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出来候へば、味醂醤油の附焼に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山厨の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論すべきにあらず候。本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵＊の一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。〔紅葉書簡抄〕

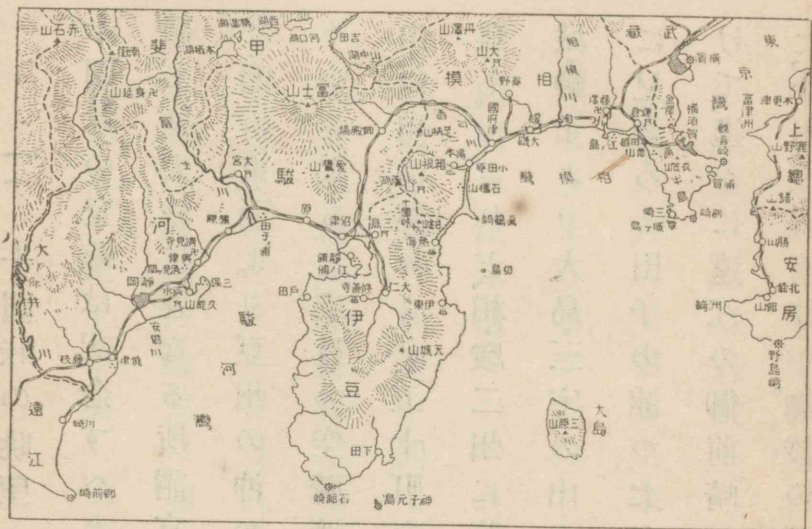
＊横濱なる菓子老舗。

二 十國峠の眺望

高山 樗牛

名は林次郎。文藝批評家。明治三十五年歿す。伊豆にあり。伊豆・相模・武蔵・安房・上総・河・信濃・甲斐・大島・三宅島等樗牛の友人姉崎正治。

十國峠三の登臨は記念すべき壯快の遊なりき。この峠は函嶺より天城に連なる所謂富士火山脈の一峯にて、頂に登れば關の東西より豆州の沖かけて十國三・五島を眺め得べしとぞいふなる。或日の空晴渡りたるに、嘲風四と此に遊びき。山の頂は熱海より五十町を出でざれば、いと高しとは言ひ難し。されど、相駿二州に跨りて、北は足柄・箱根・富士、南は天城・神子より大島・三宅の山々を望み、西は江の浦・靜浦を眼下に見おろし、田子の浦づたひに、清見が關より三保の松原かけて、遙かに遠江の御前崎に至るまで、東は眞鶴が崎のあなた、小田原・國府津・小淘綾五の磯邊に江の島・鎌倉の山々より田



越三崎のはてに至るまで、相模灘を包みて、かすかに安房・上總の遠巒を望む。景物の壮大、類ふべきものなし。殊に美はしきは、江の浦より清水に至るまでの田子の浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き緑なるが、蒲原與津わたり淡き紫に薄れ行けるさまなど、心ゆくばかり嬉しく、天津少女の天降りけん三保の

松原の春霞にかすめるが、この世ならず見ゆるも、ゆかし。仰げば高き富士が峯の千古の姿は、言ふも愚かや。あゝ、誰が造りなしけん。自然の姿の美しさよ。函嶺の一峯に雲起りぬ。初は膚寸の大きなりしが、谷開け、風加はりて、漸く廣がり、はては八峯の全部を掩ひて、西の方々に靡きぬ。愛鷹の峯にかゝるころ、富士風に逆ひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、劔拔萬丈、二山の間、白雲の壁を築くよと見る内に、その頂、山風に散じ、轟然として満天を覆ひ來りて、四顧濛々、咫尺を辨へず。余は衣襟を合せて凝視すること多時。嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すると三たび。須臾にして、空晴れて、函嶺の崔嵬、富岳の清容も

との如し。 満天の雲霧、余、そのいつこに行きたるかを知らざりき。 (樗牛全集)

二三 筆の歌 武* 島 羽 衣

月花めづるみやび男が

向ふ机の紙のうへ、

走れば、やがて、歌成りて、

星照り、日出で、鳥歌ふ。

天地ゑかく繪だくみが
倚るや南の窓の下、

動けば、やがて、畫は成りて、

水落ち、木生ひ、草青し。

壯心鬱勃天を衝く

英雄の手に觸るゝ時、

落筆のもと龍蛇とび、

雲煙くらく地を蔽ふ。

慷慨淋漓怒髪立つ

志士のかひなに執られては、

片言隻句鬼神泣き、

*名は又次郎。國文學者、詩人。日本女子大學校教授

哀音ながく世に傳ふ。

功成り、名とげ、業卒へて、

身は棄てらるゝ竈の中、

煙と化して消ゆれども、

恨みぬ筆の心清しや。

*女子教育家。
實踐女學校長。

一三 マヂソン夫人

下田 歌子

ジェームス、マヂソンは結婚後數年にして北米合衆國の内務卿となつて華盛頓府へのぼつた。マヂソン夫人は天性溫和で、愛嬌があつて、辭令に巧な人であつたから、誰でも夫人に遇つて愉快を感じないものはなかつた。マヂソンが時の大統領ジェファソンを助けて衆望を集めたのは、重に夫人の力によつたのであつた。

マヂソンは性質が極めて剛直で、どちらかと云へば、一寸冷淡に見えて、他より畏敬こそされるが、悅服される徳には乏しかつた。之に反して、夫人は如何にも溫和な愛嬌のある人で、そして、思ひやりの深い慈悲心に富んだちであつたから、丁度夫の短所を補つて大に其の事業を助け得たのである。マヂソンの反對黨でも、一度夫人に接すると、忽ち其の反抗の鋒が折れて、遂には敵對することが出来ぬやうになつたといふことである。

マヂソンはかくの如き良妻の内助を得て、遂に前後二回大統領に選舉された。滿八年の在職中、或は内憂外患こともごも至つて、其の勞苦・困難は一通りてなかつたにかゝはらず、幸に内には夫人の慰藉あり、外にもまた夫人の助勢を得て、其の難局を切開くことが出來た。

任滿ちて、めでたく郷里ヴァージニアのモントピリアーと云ふ處に退くや、此所に廣い邸宅を構へて、高年の母と共に住つた。ある時、某夫人がマヂソンの母を訪問すると、九十歳の老嫗は眼鏡をかけて編物をして居た。夫人は老嫗にむかつて「御退屈ではお出なされませぬか」と問ふと、老嫗はほゝ笑んで「いゝえ、お蔭で少しも退屈いたしませぬ。ま

北米南大西洋區
八州の一

だ編物や書物が伽をしてくれますから。それに、母が能く私を慰め、又、手となり足となつて私の思ふとほりにしてくれますので、一向困りませぬ。」と云つた。その夫人は驚いて「えゝ、あなたの御母様。それはどなたで。」と眼を見張つて尋ねると、老嫗は「あれゝ、彼處に。」と指さす。

見ると、媳のマヂソン夫人が濡れた手を白い前垂でぬぐひながら、今隣室から出てくる所であつた。ホワイトハウスで華やかに着飾つて居た頃に引替へて、粗末な地味な衣服臺所の用でもして居たかとおもはれる扮装。まるで純然たる農家の主婦であるが、その氣高さ奥床しさに、客の夫人は驚き感じて、暫時媳と姑とを等分に見比べて居ると、兩人

*北米合衆國大統領の官舎

は顔を見合せてほゝと笑つた。なる程、老嫗が母と呼ぶのも無理は無い、夫人の態度は慈母の愛兒を視るのと少しもかはりがなかつた。で、其の夫人は、歸つてから、人に語つて、「マヂン夫人は交際に巧な、快活な、圓滿な人として世に響いて居るが、私は却て一農家の主婦として能く其の家政を理め、能く其の姑に事へるところの天晴な良妻として見た方が遙かに貴いと思ふ。誠に花の美なるは實の佳なるには及ばぬ。」と感嘆したといふことである。(良妻と賢母)

一四 樂地

幸* 田 露 伴

*文學者。
文學博士。

如何なる處にも樂しき處はあるべし。又、如何なる處にも樂しからぬ處はあるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に満つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しきを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく煨芋の煖きに笑むをかしさもあるべし。金殿・玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店・草屋にも樂し

き處はあるべし。

此の世は我一人のために設けとゞのへられたるものにあらず。されば、親としては、我が子をも飽かず思ふことあり、子としては、我が親をも物足らず思ふことあり、人を使ひては、齒痒くもどかしく思ひ、人に使はれては、腹だたく不満、不快に思ふことあるも、免れ難き世の習なり。まして、身貧しく、學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜しく、あぢきなく、樂しからず思ひて、我が如く苦しき目をのみ見て生きながらふる者もあらし。など、身をも棄ててんほどまでに、或は恨み、或は嗔り、或は憂へ悲しむこともおのづからあるべし。されど、其の人より言へば、窮苦の底

の底に沈みて、右へも左へも行くべき道のなきやうなれども、他の人より言へば、かうくしたらんにはよかるべきものをもと思ひ、或は、また、少しは樂しきかたもなきにはあらずるやう思ひ做さるゝこともあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければ、樂しき處、樂しむべき處を見出し得ば、如何ほど窮苦、不快の中に在りとも、人は自ら勇氣を得て、苦中の苦に堪へ、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなくとも、樂しからぬがなかに樂しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も闊く氣も裕かになりて、おのづから人品

太閤秀吉公の御簾中は、信長の足輕たりし杉原入道といふものゝ娘なり。幼年の時はおまんといひて、尾州にて信長の家中奉公を勤め居たり。

信長の馬廻に伊藤右近といふものあり。おまん出生の時より此の右近方にて世話致し遣はしける故、始終右近が世話にて彼方こなたを勤め居たり。信長の十人衆目付役の内なる岩卷一若といふ者の方に勤め居れる頃、木下藤吉は未だ足輕にて、うこぎ長屋といふ處に住めり。藤吉其の頃、妻を離別して後妻なければ難澁に及びける故、何とぞ岩卷が方に居るおまんを妻女に求めたし。といひ入れけるに、おまんは早速に返事もせずして、まづ伊藤右近が方へ行きて

*表にうこぎ垣ありて内に長屋あり。足輕の仕切る處なり。うこぎの勤めをいふ。みはうこぎをいふ。

*後に淺野長政。

相談に及びけり。右近申すには、彼の藤吉といふは名高き發明なる者なれば、末々の爲にも宜しかるべし。支度は我が方にていたし、夜着蒲團鏡櫛笄までも遣はすべし。されど知らるゝとほりの困窮なれば、錢金の世話は出來まじ。其方の叔父淺野彌兵衛へ參りて金子を借り申すべし。彼は勝手よく暮せば、恥かしくとも無心を申すべし。とて、淺野方へ遣はしけり。おまん參りて金子一兩と木綿一反と鼻紙三折とを貰ひて來りければ、右近大いに歡び、夜着蒲團など洗濯致し、其の外、當分入用の道具ども取揃へ、日柄を選び、きくと申す下女同道にて、藤吉が方へ遣はし、婚姻いたさせけり。

然るに、藤吉たん／＼と立身出世して、終に太閤秀吉公と仰がれまし／＼けるをりしも、彼の右近が事を思ひ出され、天下へ觸を廻して尋ねられけるに、をりから、右近は處々に隠れ忍び、名を隠してありしが、困窮堪へがたく、飢に及ぶによりて、甲州の加藤駿河守方に客分となりをるよしを聞き召され、右近夫婦とも大阪の城へ呼ばせ給ふ。さて、御懇の御意ありて、昔の事ども言出したまひ、落涙を催され、繻子の夜着・蒲團に白銀五十枚、鶴の香合といふ名器を添へて、御簾中の手づから右近夫婦に下し給ふ。其の時、夫婦が側によりて、御召物ことの外によごれたり。昔の御禮に我等洗濯して參らすべし。脱ぎてゆかれよ。とて、別に着

類を賜ふ。右近夫婦古綿入脱ぎおきて、下されける着類を着て退出しけり。十日ほどありて、先日の洗濯出来あがりたりとて、御城へ召され、御簾中ちきに下し給ひぬ。右近在子孫、今に此の品を傳へて什物となすとぞ。世には、輕々しき者も段々立身出世して成上る時は、必ず昔の顔をせぬが人情なり。さるが中におまんの方の昔を忘れ給はざるところ、感ずるに餘ありといふべし。(雨窓閑話に據る)

一六 黒井繁乃

年若き女の身にして夫に後るゝばかり悲しきはあらざるべし。しかも此の悲に堪ふるものはなほ世にあらん。鐵

石の貞心、身を終ふるまで之を潔うする者に至りては更に難かるべし。さるをよく之を全うして、貧苦に撓まず、艱難に挫けず、幼き孤兒をおふしたて、家系のまさに絶えなんとするを繼がしめし黒井繁乃の如きは、最も類まれなるべきなり。

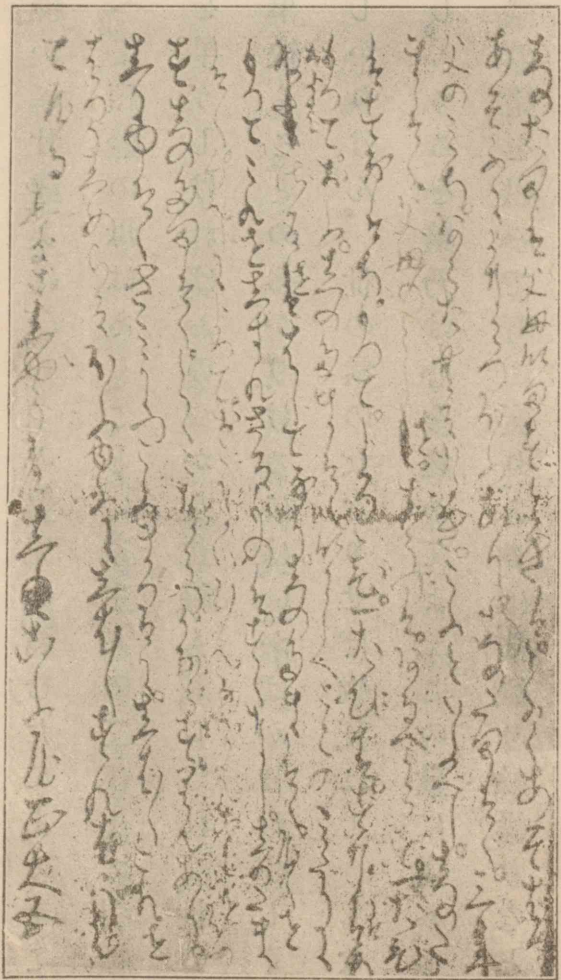
繁乃は上杉氏の家臣黒井四郎左衛門の一人娘にして、文化元年七月出羽國米澤なる袋町に生れき。七歳にして、父を亡ひしかば、母の膝下に人となり、後、同藩士湯野川某の三男なる源三郎を夫に迎へて家を嗣ぎぬ。文政六年七月、一子信藏を生みて、家門の榮えいよ、まさらんとしけるに、げに禍福は糾へる繩の如く、同じき年の十一月、夫源三郎病の床

*海軍中將黒井悌次郎の父。

に打臥しけるが、やうく重りゆきて、心こめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅にぞ出で立ちける。繁乃は其の時纔かに廿歳、よはひ一つの嬰兒を育むだにあるを、これに加へて頽齡の母はあり、ことに家主人の二代まで引續きて世を早うしければ、おのづから食祿も減らされて、世の活計に事缺くことの多かりけるには、いかばかりわびしくも亦悲しかりけん。世の常の女なりせば物狂はしうもなりぬべし。さるを繁乃は心を鎮めて、よくこの歎に堪へ、あるは羽織の緒を組み、町に賣り、あるは機織り、絲繰りなどして、僅かの賃銀に換へ、よく母に事へ子をいつくしむこと年かさなりければ、遠近の人々、こをき、傳へて、ほめ感ぜぬものこ

そなかりけれ。

信藏七歳のほど、繁乃隣なる糟谷某といふ翁に就きて四書



黒井繁乃筆假名論語

を學ばしめき。されど其の身の藩士の女のならひとて面正しき學の道にも入り立たず、たゞ纔かに假名文字知れる

ばかりなるを恥ぢて思へるやう、子を賢からしめんとせば、おのれ先づ賢からざるべからず。われ文字に明らかならずして、いかでかわが子の誤れるを正し疑はしきを明らめ得べき。種しあらば岩にも松は生ふるものを、いでや今より學ばんも遅からじ。とて、其の後は信藏のものまなびに行くと共に、吾も亦隣家の窓のもとに立ちつゝ、漏れくる翁の聲のまに、假名もてひそかに書きうつし、信藏の歸りきて復習する時、わが記したると引きくらべて、「こゝはかくかくと改めよ、そこはしかく」と讀まんぞ正しき。」と、絶えず傍にありて教へ導きしが、かくする事二年ばかり、遂に四書のことくく寫しはてたりとなん。「世*の中に思あれども、子

*土佐日記の歌。

をこふる思にまさる思なきかな。とか。子を思ふは人の親の常とはいひながら、かくばかり真心もて其の子をおふし立てしもの、思ふに世にはすくなかるべし。あはれ今孟母ともたとふべきは、この繁乃なるかな。

その後、信藏は藩の學校興讓館に入り、拮据勉勵して、學業大に進み、十三歳になるまで引續きて秀才の譽を擔ひければ、藩公いたくめで給ひて、黄金あまた賜ひて賞せられき。これみな繁乃が力の致すところとぞいふべき。信藏ある時、母の記し、假名書きの四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく蠹魚のすみかとなさんを惜しみて、記念としたまはらんことを請ひけるに、繁乃いふやう、かく拙

き筆の跡を残しなば、なか／＼に後の物嗤ひとなりやせん。といなみたれども、強ひて請ひとり、はしがきを添へて、うるはしく綴り合せ、國字四書と名づけて永く子孫に傳へ、以て慈母のめぐみをとこしなへに忘れざるやうなしたりけり。かくて嘉永六年八月繁乃は病みて身まかりぬ。齡五十歳なりき。

繁乃若かりし程は容姿端麗にて、あてに美しかりけれど、夫に別れし悲と、老幼を扶くる物思と、貧しく足らぬがちなる苦しさにて、いたく心神を勞したりけん、中年にいたりては、はや毛髮こと／＼く白く、齒などもほと／＼抜けはてたりとかや。其の頃信藏は學業や、成りて家は嗣ぎたりけ

れど、仕への道も年淺くて未だ志を得るに到らざりければ、
すぎはひの不自由もなほ前と異ならず、信藏が當番のため、
月にひとたび登城する時の紋服の如きも、止むを得ずつね
は質舗にあづけおきて、登城の日の近づけば繁乃は二夜も
三夜もまどろまでいそしみつゝ、とかくして錢まうけいで
て、信藏に知れぬやうに償ひかへりて打着せたりとぞ。其
の程の心づかひ、げにいかばかりなりけん。されば繁乃の
身まかりける時、信藏の悲はいはんかたなく、かくばかり身
を苦しめて、われをいつくしみたまひし海山のなさけ、あは
れいつの世にか忘るべきと深く思ひしみければ、後、累進し
て重職に就き、町奉行となりて秩祿二百五十石を食み、戊辰

の役には米澤藩の監軍として越後口に轉戦し、明治維新の
後は米澤藩少參事に任ぜられ、さてのち辭して藩の支封た
る上杉子爵家の家令となりて、遂に其の身を終へしまで、つ
ねに母の艱苦に堪へし心を心として、自ら奉ずること極め
て薄く、一生の間、絶えて煙草・茶・酒類を口にする事なく、家に
慶事あることにはこれぞ母のたまものと、先づ國字四書を
戴きて厚く其の惠をあふぎ謝したりけりとなん。
古語に曰く、言ふは易く行ふは難し。と。百の言ありとも一
の行なくばなにのかひかあらん。言は行をまちてはじめ
て尊ければなり。世進み智開くるに従ひ、徒に言多くして
行鈍きが習なるを、繁乃は言うて行はざるはなく、行ひて遂

げざるはなし。三史五經の道々しき教は受けざりけれど、おのづから聖賢の心をさとり得て、よく孝に、よく貞に、よく慈に、人の最も難しとする所に安んじて、玉となりて一生を全うしたり。其の流風遺韻、まことに、世の人をして感奮興起せしむるものありぬべし。

一七 江津川

徳富健次郎

肥後國飽託郡にあり、源を水前に發す。

「往つてお出でなはりまつせ。」

送つて來た女中の挨拶の中に、ひらりと飛乗つた船頭が纜を解くと、深さ二尺を過ぎぬ清淺の水に身を任せて、舟はするすると下り始めた。八歳の鶴子も四十六歳の余も齊しく

肥後國飽託郡。成越園ともいふ。水清きを以て名あり。

く歡聲を上げる。陶器の破片すら美しく見らるゝ清流に家鴨噪ぎ、水際の家も秒毎に趣變る面白さ。船頭を呼んで舟を中流に止めさせ、急に寫眞機など取出す。早砂取町に來て橋下を潛る。底の礫にさゞめいて居た流は、清いまゝに追々深くなる。水前寺に限らず、此の界限は何處からでも玉の様な水が涌く。神水と云ふ村の名もある位。砂取橋を過ぎて、川は野天の下を晴々しく流れ出る。右岸は千萬頃の田を限る一帶の長堤、左は木立の村が斷續して居る。其の間を追々川らしくなつた水がひたすら南へ南へと駛ると、其の水に乗つて舟が滑る様に下つて行く。水棹取つて舟尾に立つ船頭は、唯舵を取るだけである。

相變らず水は美しい。水晶のやうに透徹つてゐる。併し、底は砂取前の礫ではない。一面に藻や水草である。あの蔭には幾何の鮒が唼喝して居るだらうかと想はれるやうな美しい藻の床である。長々と深緑の髪を下流へ靡かせ、搖々と氣長に振つて居るのもある。川芹、川みつばの淡緑に戦いで居るのもある。處々水面に浮出て、白い花を泳がせて居るのもある。此等の上を滑り流るゝ水は、唯もう透徹つて、草入水晶其のまゝである。随分と急に流れるが、藻の上だから、音と云ふ音は少しも立てない。水のまにゝ舟も沈黙を續ける。唯水面に浮いた藻草を其の腹で摩つて通る時は、すう、さあ、と幽かな音を立てるのみである。

此の野川に稀に趣を添へて、水中に立つてゐる石がある。菰蒲の洲は處々に出没して、幾條にも水の流を分けて居る。十月初旬、青々としてまだ夏のまゝなる其の蔭には、繋ぎ捨てた舟もある。我ら興に乗ずる一行を載せた舟は、今藻草の上を滑り、今菰蒲の洲をかはし、一點の雲もない秋空を映して晴々しく白光りし碧光りする明るい水につと乗りかくるよと思へば、村の木立の蔭、ひたす黯緑の水を驚かして駛るのである。水も面白さう、舟も嬉しさう。舟の上の人も楽しく浮かれて、西詩など歌ふ。能書の筆から流れ出づる假名書きのものにも似て、嫺々と嬌態をつくつて流るゝ水の下手を見やりつゝ、あの眞菰の

洲の何方を舟が通るかなど賭をしたりして見る。黄色な花をつけた河骨や白い花の海芋が悠々と汀近く舟を迎へて笑ふ。黒装束の精靈蜻蛉が横目で舟をちらと見て、水鑑しつゝふらくと舞うて行く。家鴨の一群が、それ來た、刮刮と水を搔いて木蔭の方へ逃げる。好い川だ。妻の父ではないが、此の川添に水莊一つ欲しいと思ふ。と思へば、芭蕉など植ゑた、心憎い、風雅な別墅が左岸に見えた。(死の蔭に)

*名は成行。
文學者。
文學博士。

一八 水の力

幸田露伴

天に聳ゆる千尺の巖ふたつに劈きて、
山もとゞろに激り落つる 水の強さのたのもしや。

雲、絶壁を蝕んで、老樹しづかに枯藤垂れ、

亂石せぎる溪狭く、山靈、水の去るを恠めど、

「我、大海に至るべきなり、我、大海に行かんとぞ思ふ。

我、力あり我、進む。 磧礫は我、推流してん。

磐石は我、躍り超えてん。 我、力あり我、休まじ、

遮る岩は岩潰してん、とゞむる岸は岸崩してん。

我、鬪戦を厭はざるなり。 我が吶喊し、怒號する

聲は常磐に衰へじ。 見よ大海に到らでは、

必ず已まじ、休まじ。」と、 獅子と狂つて雷と鳴る

瀧川の水、瀧川の水。 水の力のたのもしや。

(心のあと)

徳川時代後期の小説家。嘉永元年歿す。名は君平、勤王家。文化十一年歿す。京都の歌人。享和元年歿す。

一九 蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修静、山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりと、かねて傳へ聞きしかば、それが助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。小澤が家僕出迎へて、「いつこより。」と問ふ。言寄る由もなきまゝに、修静まづ伴りて、某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼ぶるものなり。琴をこのみ候へども、田舎には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にておはするよ

し、東野のはてまでもかくれなし。これにより、御弟子にならまくほりして、はるくと來つるにて候。」といふ。



蒲生君平

其の僕心を得て奥に赴き、云と告げにけん、蘆庵の聲と覺しくて、いと高く、「あな、無益にも訪はるものかな。汝出でてしか答へよ。主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴したりけれど、あちこちの人に知られて、彼に聞かせよ、此に教へよ。」といは

るゝがうるさければ、近頃打擻きて薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に行きて求め給へといへ。といふ聲の、襖一重を隔てゝぞ聞えける。修靜、僕が云々といふをも待たず、更におし返して云ふ、翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しかじかの志願あれば、しばらく江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、「琴を學ばんためにきたりつ。」とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虚言は已むことを

得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き、志願を告げて、翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。といふ。蘆庵これを漏れきゝて、さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。此方へと申せ。とて、やがて面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思起せる志願の由を説示し、山陵志著述のために、古き御陵を尋ねんとて、旅寢をしつる事の趣云々と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得がたき學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こ

こらわたりりの御陵をしづかに訪求したまへ。』とて、又他事もなくもてなしけり。



小澤蘆庵

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせければ、修靜、老人の心づかひ心苦しとて辭めども、從はず。『これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かゝる奇人に宿する事の歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり。必ずいなみ給ふな。』とて、後々までもしかしてけり。

かゝりしほどに、修靜ある夜、更闌けて、子二つの頃、歸りしかども、蘆庵はいねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう、吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕をやすらはせんとして、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草くうてか。老人に物を思はせ給ふこと、心得難し。』と呟きけり。修靜聞きて、容を改め、翁の恨、理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。懺悔の爲に笑に供へん。

*山城國葛野郡衣笠村にあり。

けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。ここに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて罵るやう、「梟臣尊氏、なほ靈あらば、今いふことを髓かに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守りて毒を後世に流し、より、五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に焼け亡び、王室もまたこれに因りて卑しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくまで物を思はするは、皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。」とて、杖をもて石塔を思のまゝに打ちたゞき、かくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ち

より、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡したり。さて、酒屋を出でしかど、酔うて足も定まらず。此のまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思つて、株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて駭き覺むれば、更闌けたり。」と語る。

蘆庵ふきいだして、からくとうちわらひ、さても、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年、ある日靈山の邊へ逍遙して、長嘯子の墓をよぎりし時、流石に宿恨なきにあらねば、行きもえやらす、にらまへて、「長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは豊太閤の外族とて、位高く、且、采地も廣かるに、心さま武士に

(一)京都東山にあり。
(二)木下勝俊。
(三)慶安三年歿す。

*徳川家康の家臣。慶長五年伏見城に戦死す。

似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き鳥居元忠を捨殺にせしは不義なり。事平ぎて、罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸にして、恥を知らず、心にもあらぬ世捨人がほして、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調わろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。」と罵りながら、杖をあげて墓を殴きたる事ありけり。こは能く似たるにあらずや。」と語りもあへず、聞きも終らず、齊しく腹をかへたりとぞ。

(兎園小説)

110 天下第一の義舉

蒲生 君平

(二) 名は衛、述齋と號す。

(三) 松平伊豆守信明。

前夜は參上、御意を得、殊に柿餅の御饗應、忝く存じ奉り候。其の節、折あしく他人至り候て、用事の談話申し盡さず候。さて、拙者儀かね／＼申すとほり、歴代帝王の山陵久しく荒廢して、御祀をやめ、其の所在も明かに知り得ず候間、相尋ね候へども、尙未だ遂げず候。此度、林大學頭殿に申入れ、依つて其の使として來月五六日までに、出府、それより遂に上京仕るべく候。此は忝くも一天之君世々に御祀りありて、最も尊崇すべき第一義に候へども、亂世以來、禮法壞れ、今治平二百年に及べども、上にさまで、有識も無之につき、只なほざりになり來たる事に候。幸に當今御老中伊豆守殿を始め、大學頭

殿、いづれも皆一代の賢才に御座なされ候。御政教を勤め給ふこと、延喜天曆の昔にも劣るまじく候。此の時にして、其の一二の闕を補うて忠誠を致さんこと、拙者多年の願に候。不幸にして、去年父を喪ひ、此度一週忌も既に過ぎ候へば、右申上候とほりに御座候。之に就き、江戸にも親しき二三の御旗本の合力ありて四五兩は得べく候。又、佐野鹿沼など師友の間にて衣類、腰の物の支度を致され、數年浪々の拙者、やうやくに眞の武士に罷りなり候。されども、關東より千里西遊、六七十日の物いりに心遣ひ申し候間、前に申す儀に免じ、金子拾兩拜借仕りたく候。此の儀、先達も申入れ候

處、金の員數尙未だ定まらず、只御承知下され候間、更に如此申上候。昔、商人にも義を好み候者は、奥州の金賣吉次が九郎義經に於ける、山川屋儀兵衛が大石内藏之助に於ける、此の外にも金錢を輕んじて忠義の名を立てたる者多く御座候。此の度の儀、拙者も雪霜の寒を犯し旅行すること、貴公にも御推察候て、金拾兩御貸し下され候はゞ、是亦天下第一の義舉に御座候。忠感定めて神明に達し候はん。且、貴公の拙者に於ける、母方の姻親、家に千金を蓄へて、固より一郷の良と聞きたればこそ、拙者も外に求めずして貴公に直に御願ひ申す事に候。不備。

十一月二十八日

蒲生伊三郎

岡井仁右衛門様

(蒲生君平全集)

二 川どめ

川どめにてにはを直す旅日記。
 筈はぬすまれてから番がつき。
 寐て居ても團扇のうごく親心。
 添乳してつい洗濯が夢になり。
 迷子のおのが太鼓で尋ねられ。
 おさへればすゝきはなせば蝨。

物まうにどうれくと二目打ち。
 大三十日、息災ばかりとりえなり。
 福祿壽四五にんまへの頭痛がし。
 歌がるた人といふ字に手が五つ。

*海軍中佐。

三 香港

*水野廣徳

港門を過ぎて内港に入れば、波靜かなること池の如く、一千八百呎のヴィクトリアピーク、海岸より突兀として直ちに中天に聳ゆ。宏壯なる石造家屋、海に沿ひ山を負ひて、層々段を爲し、朱屋白壁、翠微に連なるところ、さながら畫の如し。殊に急勾配の索道、山麓より山上まで、一直線に綠林を切割

*天保十年即ち清
國道光十九年鴉
片戰爭の結果占
領せらる。

くこと、一千餘呎、素練懸垂して、恰も瀑布に似たり。
香港島は支那廣東省珠江江口に在り、面積約三十平方哩の
小島なり。一千八百三十九年、英國に占領せられ、爾來、其の
版圖に屬せり。此の地元一小漁村に過ぎざりしが、英國の
占領せし以來、東洋經營の策源地として、銳意開發に努め、今
や人口四十六萬餘、貿易年額五億弗、日本よりの輸入額二千
五百萬圓を超え、商業の盛なること實に東洋第一と稱せら
る。帝國の總領事館こゝにあり。在留の邦人の數、一千人
を超ゆといふ。市街は海岸に沿うて延長し、その中央部は
純然たる西洋式市街にして、宏大なる建築物軒を並ぶれど
も、元來土地仄迫せるが故に道路甚だ狭く、殊に不潔なる支

那人到る處に徘徊して、大に美觀を妨ぐ。前年海岸を埋立
て、稍市街を擴張したれども、尙狹隘を告げ、今や對岸なる九
龍租借地に向つて市街を開くに至れり。市街の兩端は純
支那人町にして、臭穢甚だし。

香港の人口四十六萬人中、英人の數は僅かに四千人に過ぎ
ずして、支那人の數は之に百十倍す。故に、政治以外の實權
は始ど支那人の手に歸せるが如し。

香港に於て注目すべきことは、植林事業なり。この島はも
と一樹をも見ざる秃山にして、到る處に山骨露出し、暑熱酷
烈に、瘴癘の氣深く、人間難住の地とせられたり。るに、英
人の之を占領するに及んで、熱心に植林を努め、苦心經營す

ること數十年、遂に其の目的を達して、今や全島蒼蔚として、翠綠滴るが如く、風致を美にし、氣候を和げ、病疫の發生を減ずるを得たり。吾人は今眼前にこの島を望みて、其の能く岩石を化して綠林となしたる英人の熱心と努力とに敬服すると同時に、我が朝鮮、遼東の禿山が綠樹を以て蔽はるゝ日の一日も速かに來らんことを願ふなり。

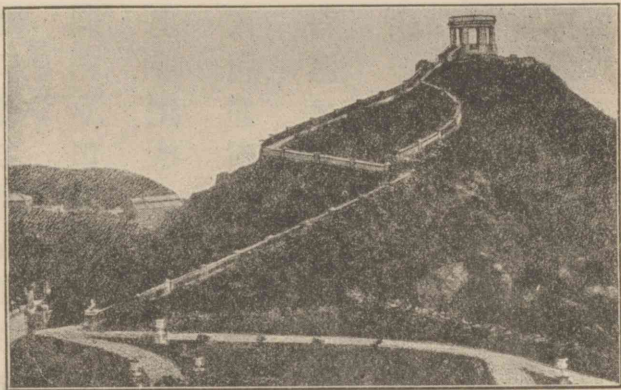
香港は北緯二十一度十八分、我が臺灣の南端、鶯鸞鼻と略、緯度を同じうす。氣候は一般に暖かにして、冬季と雖も、氣溫は内地の四月頃より下ることなし。三・四・五の三箇月は雨期にして、霖雨連日、陽光を見ず。香港名物たるベスト亦此の時に發生す。ベストは香港の特有病にして、官民多年の

熱心なる撲滅策も未だ全く其の病源を絶つ能はず。毎年之に斃るゝもの尠き時も千を下らず、多き時は萬を超ゆと聞く。但し、罹病者は殆ど全部支那人にして、洋人、其の他の之に犯さるゝものは極めて尠し。されば、洋人は之を支那人病と稱し、毫も恐るゝ風なしといふ。

香港は元來新開の地、殊に海上の小島なれば、固より舊跡名所の訪ふべきなく、又勝地幽景の探るべきなし。唯外來人の一遊を試むべきは、ヴィクトリアピークなり。壽永の昔、九郎義經が駈降りたりといふ鴨越の嶮も斯くやと思はるゝばかりの峻坂を、海岸近き麓より海拔一千三百呎の頂上まで、一直線に通じたるケーブルカーは、三越の自働段梯子に

驚く日本人の眼には、慥かに一奇蹟たるを失はず。二分の

一の急勾配をば一條の綱索によりて引上げらるゝ心持、若し此の索が切れたらばとは、初めて乗りたる田舎者の必ず一度は抱く杞憂なるべし。乗車約二十分にして、香 ヲクトリヤガツプと稱ふる終點に達す。此處より山頂まで、綠松の間を縫うて、港 セメント固めの道路を通ず。ホテル住宅など、或は斷崖を負ひ、或は嶮壑に臨み、層々相重なりて林間に散在す。その景致、停歩顧



眇の價値なしとせず。山頂に近き處に兵營あり。戍兵今は多く本國に引揚げ、僅少の守備兵を殘せるのみ。絶頂に信號所あり。島の背面には處々に砲臺を築けり。海拔一千八百二十呎、香 ヲクトリヤピークの頂上、支那海を吹渡る涼風に浴しつゝ、四方を眺望せんか。香港の港は脚下に湛ひて池の如く、浮べる船舶尺に満たず。前方には、九龍半島雙眸の間に落ち、廣東の山峰その後、に透迤たり。汽車は黒煙を噴きて林畝の間に隠見し、汽船は銀尾を曳きて蒼波の上を滑る。眸を轉ずれば、大小幾多の島嶼は、遠近點綴、香港の港を圍み、香港の港を護る。良いかな、香港の灣、美しいかな、香港の山。地は南支の要衝に當りて、支那海の重鎮

たり。港は防備宜しきを得て、難攻の軍港たり。國を東洋に建つるもの、この良港に對して、垂涎禁じ難き感なくんばあらず。

(波のまにまに)

*文學士。

二三 金字塔

久保 勘三郎*

「時は凡てのものを嘲る。されど、金字塔は時を嘲る。」とは、埃及の諺である。六千年の昔、さしも榮華に誇つたエナオピヤの都も、ありし昔の面影を留めず。ナイルの河の水は昔のままに流れてゐるが、時世の定め難きはその淵瀨にも似てゐる。沙漠の風に嘶く悲しげな駱駝の聲を聞きながら、六千年を一夢と見た此の亡國の記念碑を俯仰する時、何人

も無量の感慨に打たれぬものはなからう。

*埃及の首府。

埃及の地を踏むもので、金字塔の頂を窮めないものは、眞に埃及を訪れたものとは言はれない。ポートサイドから汽車で行くと、四時間程でカイロ府に着く。此處から西に七哩。電車で行けば、一度ナイルの大鐵橋前で降り、橋を徒歩で渡つて、また車に乗る。南方遙かに埃及の紺青の空に判然と輪廓を畫いた大金字塔がすぐ眼に入る。近づくに従つて、其の頂が段々高くなる。駱駝を勧める者、案内せんと言寄る者、運氣縁談を占はんと附纏ふ者など、色々のうるさい亡國の民を拂ひのけて、深い砂路に靴の踵を埋めながら、臺石まで近づいて、嶮しい斜面を見上げると、之に登る力と

勇氣とがあるだらうかと、一寸たじろぐ。白いガウンを附けた年輩のアラビヤ人の番人が、すぐ人の顔色を讀んで、片



アラビヤ

言交りの英語で、もしお登りならば。」と訊く。頷いて見せると、頑丈で體の軽さうなアラビヤ人を三人あてがふ。二人は左

右の手を取り、一人は後から押上げるのである。

削り立てたやうな急勾配で、下を見ると、ぞつとして目が眩く。

喘ぎく、休みく、やつ

との思で絶頂に達する。達して、目を放つと、脚下に展開する下埃及のパノラマに恍惚と酔はされて、今までの苦痛や疲勞は何時の間にかすっかり忘れて了ふ。

脚下には大獅子面像が、檜風沐雨に飽いた幾千年の首を砂上に擡げてゐる。谿の下手にはナイルの大河が帯のやうにくねつて、銀色に光つてゐる。岸に沿うて、棗椰子の木立が青く點々としてをり、其處彼處に黄色、黒色、鳶色がとびとびに野面を彩つてゐる。向ふには遙かにカイロの市街の小さい縮圖が見えてゐる。谿を越えて東には、モカタムの丘が低く横はり、西には音に聞えたサハラ沙漠が蜿蜒として波濤の如き砂丘を見せてゐる。

塔頂に佇んで下界を瞰下し、遠き昔の有様を胸に畫きつゝ、時の移るのも忘れてゐると、案内人がせき立てるので、止むを得ず下へ降りる。臺石の近くに内部へ入る入口がある。立留つて覗いて見ると、中は眞暗である。腰を屈めて中に這入ると、松明の光が行手を照す。此の路の長いことゝ、険しいことゝ、暗いことゝ、冷たいことゝは如何にも非常なものである。女王の室から大廻廊を攀ちて皇帝の室へと出る。近代人といふ没趣味な旅人の手に傷けられて今は空になつてゐる石棺の中も覗いて見る。磨をかけた石壁には、此等の人々の署名が充ちてゐる。やがて、入口に立戻ると、さら／＼する日光に暫し眼は瞬く。

臺石の傍に立つて再び頂を見上げると、山の如く聳え立つた金字塔、是ぞ世界第一の大きい高い耐久性のある最古の墳墓であるといふことを、前より一入深く感ずるのである。

(學士會月報)

*國文學者。
東京帝國大學教授。

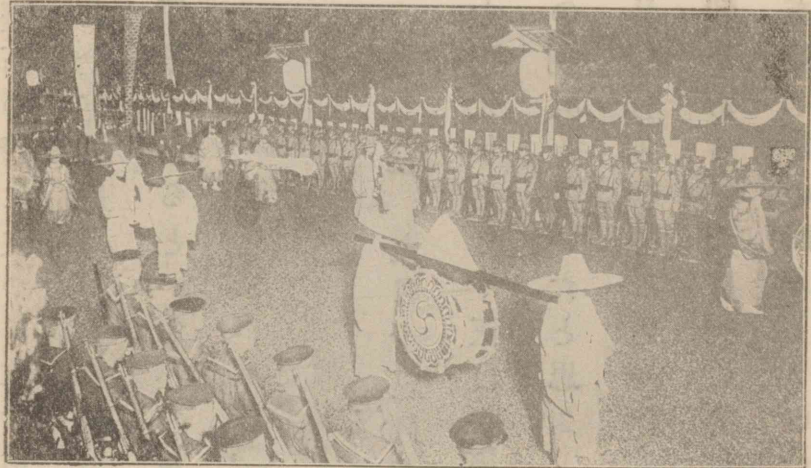
二四 九月十三日の夜

芳賀 矢一

大正元年九月十三日午後七時半頃、宮城の正門外で儀仗兵の喇叭が響いたと思ふと、松明ふりかざした仕人を先頭に、長い行列が静々と練出して来る。儀容肅々、一絲も亂れぬ観がある。大眞榊に懸けた鏡が榊にふれて、鈴のやうな音を發し、その神々しさいはうやうも無い。正八時御靈柩を

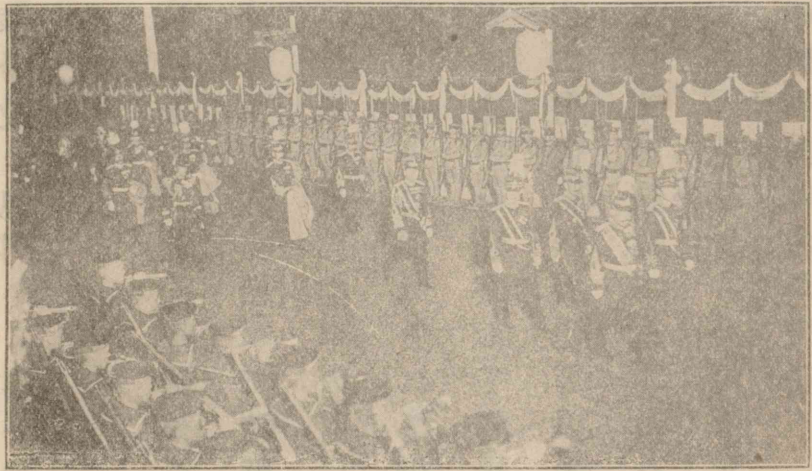
王院宮載仁親
王伏見宮貞愛親

天皇陛下・皇后
陛下・皇太后
皇太子殿下・淳
宮殿下・高松宮



明 治 天 皇

轎車に奉安して、御名代宮・大喪使總裁宮兩殿下隨ひ給ふ。轎車のきしめく音は形容は出来ないが、誠に高く哀しい音である。既に二重橋を御出ましになつたと思ふ頃、其の音はまだ門内にある吾等の耳に響く。鐵橋外の御假屋には畏くも三陛下・三殿下の拜送して立たせ給ふを拜し奉る。砂を敷詰めたる御通路を靜かに蹈んで、兩側



御 大 葬 儀

に堵列して居る兵隊、其の後に多少の間隔を置いて奉送して居る民衆の間を過ぎて行く。兵士は捧銃して不動の位置を保ち、奉送團體も靜肅で、少しの人波も打たぬ。唯此の靜寂を破るものは、堵列兵の吹奏する哀の曲と、數分毎に打出す弔砲の響とである。沿道數箇處の寫眞場からは、時々マガネシヤを燃す白光が閃く。

葬場殿の總門から第一神門を入れば、電燈の光、篝火のかゞやき、白晝のやうである。左右の幄舎の前には、菊の黒い御紋章を附けた大提燈がいくつともなく連なつて居る。やがて御儀式が始つて、誄歌の聲が悲しげに聞える。葬場殿に据ゑられた轎車の前に今しも陛下の御拜があると思へば、そゞろに涙ぐまれて、御誄詞を稱へ給ふ玉音は聞えないが、御心中を恐察して滿場皆聲を飲む。英・獨・西・佛・米等諸國の御名代、特派大使等の參列して居る大喪儀、我が國史あつて以來の盛儀であるのみならず、東洋で未曾有なことであることを思つて、今更ながら先帝の大御稜威をしのび、崇高の感、感謝の念が交、涌く。

零時四十分御葬儀は終つて、午前二時といふに、汽笛一聲、文武百官の最後の敬禮を受けさせられて、御靈柩は長へに東京の地を御去になつた。轎車は葬場殿の中央に榻に乗つたまゝ横たはつて居る。

松明の火、鈍色の衣、千年以前の昔に返つて、古代の日本がしみじみと身に沁む。之に對して電燈の光のかゞやき、文武官大禮服のきらびやかさ。轎車の軋の怨むがごときに對して、弔砲の轟の天空を劈くがごとき、誄歌の古樂に、喇叭の哀の曲、一つとして舊日本と新日本とを對照せぬものは無い。神代ながらの皇國を憶ふと同時に、國光の世界に輝く新興國を念はせるのである。眞に曠古の御大葬、是は我が

國より外には見られぬものである。沿道數十萬の奉送者も、皆此の心を以て靜肅に首を垂れたのである。諸外國の特派使節も恐らくは亦同一の感を有したであらうと思ふ。此の間に國民の感受せねばならぬ偉大な教訓は、實に明治天皇の最後の御教訓である。(筆のまに)

二五 禁庭の野分(昭憲皇太后御作)

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕づつの光も見えず。とかくする程に雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は尙雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ

鳴りはたゞきて、夢現とも思ひ定めぬに、ひまなく稻妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はやみぬれど、風烈しう吹き出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いと目もあはず。

*英照皇太后

上には民の爲とて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にましく、この風の音に御心を惱まし給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くる程に、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。

今をさかりなりし眞萩も、名残なく散亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。

おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神も心して、

稻葉の上はよきて吹かなん。

なほとやかくやと胸をいたむるほどに、いつとなく静まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちるにけり。

曾我祐成。
曾我時致。

二六 空行く雁

曾我物語

頃は人皇八十一代安徳天皇の養和元年辛丑、新玉の年立返りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに、母御前。父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何處にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ。といひければ、はるかに忘れたるこし方も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣くく、のたまひけるは、あの曾我殿こそ己らが父にてあれ。と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

曾我祐信。

工藤祐經。
源賴朝。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤とやらんに射られ、死に給ひぬと兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我らをも殺さんとや思ふらん。我らが此の里にありと知らずや過ぐらん。などおとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて、夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出て遊びけるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたる

*河津祐泰。

鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類すらかくの如し。我らは人倫に生れながら、わどのは弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と申してありきとかや。父だに世におはしまさば馬鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者にも、馬鞍・弓・矢を持ちて物を射ありく者のあるが羨ましきよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前のこひしく思ひ参らせらるゝぞや。とて、袖に顔をさし入れてさめくと泣きければ、弟もこざかし顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞

きつけ、あな、あさまし。人もこそ聞け。いかに、和上臈たち、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とくく入らせ給へ。」とおそろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて、後に内へは入りにけり。

二七 月山

田山花袋

潤い高原から、荒漠とした平野から、乃至は連亘した山巒の峠から、或は湖水を隔て、或は碧い海を越して、遙かに地平線上に名山の姿を望んだ時ほど、旅情の動くことはない。私は彼方此方から種々な名山の姿を望んだ。そして私は特にそれを眺める位置に注意した。

*名は録彌。文學者。

ある朝、私は岩手山の姿を停車場前の旅舎の西の窓に発見した。ある夕暮には思ひもかけない鳥海山の姿を遠く離れた絶海の岬頭に発見して驚喜の聲を擧げた。ある日、私は羽前と羽後との間に横たはつてゐる大きな峠を一日かかつて越した。それは秋で、落葉が疎々として帽の脰を掠めて落ちた。處々に柴栗が落ちてゐる。拾ふものもない。又長い山路を滅多に逢ふ人もない。私は退屈凌ぎにその柴栗を拾つてぼつ／＼食ひながら歩いた。峠は峠に續いて居る。勿論それは小さな起伏に過ぎないけれど、それが行つても行つても盡きない。日は暮れつゝある。ふと私は私が前に越えて來た山嶺の起伏が盡きて、夕日に明るい

野の濶くく展開されてゐるのを認めた。續いて私はその野の向ふに連亘した群山の上に、丁度月が半輪を空に現はしたやうな大きな山の姿の面白くたなびいてゐるのを眼にした。

私は山の名を知りたかつた。しかし誰も聞くべき人はなかつた。月山——かう私は想像した。しかしそれが果してさうであるか、どうか、わからない。私は雲もかゝらずに美しく晴れた山色を眺めながら、崖に添つたさびしい山路を下つた。ふと眼下に夕暮の烟に包まれたさびしい小さな町を發見した。私は地圖を披いた。確に金山町だ。今夜泊るべき金山町だ。と向ふから行商らしい男が絲立を着

*山形縣最上郡金山村

て歩いて來た。私は指して訊ねた。「さうだ、月山だ。」かうその旅客は言ひ捨て、去つた。

「雲の峯いくつ崩れて、月の山。」例の芭蕉の句の中にも立派な寫生があるのであつた。私は一日の疲勞を忘れたやうにして、その夕暮の色に彩られた遠い山の姿に見入つた。旅情が涌き上つた。私は驅けるやうにして峠を下つて行つた。(山水小記)

二六 月光の曲

ボニ^(二)にありし日の事なり。われは暫しそゞろ歩きして、後、晚餐を共にせばやと思ひて、ベート^(三)トーフエンを訪ひぬ。さ

(二) 獨逸ライン河の左岸にある都會
(三) 獨逸の作曲家。

て、連れだちてとある薄暗き小路を過ぎけるに、友はつと立止りて、いふやう。

「何者の音ぞ。あれはわがものせしへ調のソナタなり。聞きたまへ。見事にも奏づるものかな。」



ンエフートーペ

そこはいぶせき伏屋なり。われは軒の下に佇みて聞きとれつ。樂の音はや、永くうちつづきたりしが、末節のなかばにてはたと止みて、深き惆悵の聲

漏れきぬ。

「わらは、この曲をつゞくる能はず。こはいみじく妙な

*獨逸ラインの河の
左岸にある都會
の二十より約二十
哩。

るものなれば、拙きわが手には合ふべくもあらず。いか
なれば、わらは、ヨーロッパの演奏會にも行くことの叶は
ぬ身の上ぞ。」

伴侶の聲として、

「わがはらからよ。よしなき事。悲しみ歎けばとて、せん
かたなきにあらずや。われらはこの家の家賃すら拂ひ
かぬる身なるものを。」
「ことわりなり。されど、わらは、生涯のうちにとゞ一度、
たゞ一度なりとも、いみじき樂の音をきかまほしうこそ。
されど、かく言ひたればとて、せん方もなし。」
友はわれを顧みて、いひぬ。

「入りて見ん。」

われは叫びぬ。

「入るとや。入りて、何をかなすべき。」

友は氣のりのしたる調子もて答へぬ。

「かの女に一曲を奏て聞かせん。如何にもこの道にふさはしき感情あり、天才あり、理會力あるやうなれば、かの女は必ずわが奏つる所を解し得ん。」

わが制しも敢へぬうちに、友の手ははや戸にあり。戸は開きぬ。われらは内に入りぬ。

蒼白き顔したる若者、机に凭りて靴を造れり。傍に古風なるピアノありて、うら若き一人の少女、悲しげにその上にも

たれかゝり、髪の手は顔の上に垂れたり。二人ながら装は瀟洒なれど、その衣はいたくあはれなるものなりき。われらのつと入りし時、二人は立ちあがりて、こなたを眺めつ。友はいひぬ。

「免したまへ。いみじき樂の音に誘はれて、かくは打驚かしまゐらせたり。わが身は音樂者にて侍り。」

少女は面を赧め、若者はうち沈みて、迷惑なるけしきなり。友は言葉をつぎぬ。

「われは御身等のうち語らふを漏れ聞きたり。所用といふはこの事なり。われ御身等のために一曲を奏でんと思ふが、如何に。」

事の餘りに唐突なりし上に、友の身振の何となく滑稽なりしかば、この家の沈鬱は頓に破れて、皆思はずもほゝゑみたり。やゝありて、若者、

「忝し。されど、われらがピアノはいと粗末なるが上に、樂譜も無ければ、」

友はいはせも果てず、

「樂譜無しとや。さらば、かの年若き人はいかにしてか。」

言ひも終へずして、友は面を赧めぬ。この時、友はふと少女の面を見しに、あはれや、かの女は盲にてありけるなり。友はあわてゝ語をつぎぬ。

「あな、免したまへ。われはつゆ知らざりしなり。さらば、」

かの人は樂をば耳もて覺えたまひしか。さはれ、演奏會にも行きたまはずときく。いつくにてかその譜をば聞覺えたまひし。」

「われら、二年あまりブルール*に住み侍りしが、その頃、程近きわたりにある姫君の住みたまへるが、樂をば奏てたまふ、夏の夕べなどには窓をうち開きてもものしたまふが例なりければ、われらはその窓の下をさまよひありきつゝ、只管にその音に耳傾くるを常とし侍りき。」

少女は深く恥ぢらひたる様子なりければ、友はこの上には何事をも語らで、やがて、靜かにピアノの前に座を占めて奏で始めたり。友はいと興に入れるものゝ如く、その指は鍵

* 獨逸ライプツィヒの河の左岸、ボンとロリンとの中間にある小都會。

板の上を左に右に走り歩きて、妙なる調はいよ／＼美はしく、また、いよ／＼諸和せり。げに、われは、わがベートーフェンを知りしよりこのかた、彼の今宵の如く妙なる樂を奏づるをば聽かざりき。二人は驚愕と歡喜とに一言もえ言はず。若者は靴を下におき、少女は頭を少しく前方に垂れ、手もて胸を堅く抱きつゝ、ピヤノに近く腰を下せり。われらは齊しく靈妙不可思議なる夢路をたどりつゝ、只管にその夢の覺めんことを氣づかひたり。寂しき蠟燭の焰は俄かにゆらめき、またゝきて、遂に消失せぬ。友はこゝに暫し中止せしかば、われは起ちて窓をおし開きて、輝ける月光をば室内に導き入れつ。室はまた元の

如く明るくなりて、月の光はピヤノと友とをいと強う照したり。されど、友の感興はこの事の爲に絶だれたりと覺しく、友は頭を胸の上に垂れ、手を鍵盤の上に置きたるまゝ、深き冥想にうち沈みぬ。若者はつと立上りて、友の側に寄りて、つゝましげに問ひぬ。

「いみじき人よ。御身は何人にてましますか。」

「まづ、わが奏で出づるを聞きたまへ。」

友はやがてソナタの初なる小節をへ調にて奏でぬ。

「さては、御身はベートーフェンにておはせしか。」

呼ばはりさま、二人はかれの手に熱き感謝の涙を注ぎぬ。

友はやをら起ちあがりて去らんとしければ、かれらは言葉

を盡して引きとめつ。

「願はくは、われらがために今一度、たゞ一度、奏で給へや。」

友は再び樂器の前に復しぬ。月光は窓より入りてかれのおどろなせる亂髪とその偉大なる軀幹とを輝くばかりに照しぬ。

「われは月に寄せたる即興の一曲を奏でん。」

友はかく言ひつゝ、空と星とをうちながめて何事をか沈思することくなりしが、やがて、その手は鍵板の上に落ちぬ。かくて、悲しくも又かぎりなく愛でたき妙音をぞ弾じ出したる。そはものしづかに樂器の上に漂ひて、さながら平和なる月光の物暗き地上に落ちたるにも似たりけり。

について、妖魔が芝生の上に躍り狂ふが如き奇怪なる短曲あり。更に翱翔不安、さては、恐怖などに魘はれたる如きものゝ一節にて終りぬ。われらは皆瑣々たる清き樂音の翼に載せられて、感歎と驚愕との境に運び去られたるが如き心地したりき。

友は起ちて椅子を押しやり、戸口の方にうち向ひつゝ、

「さらば、御身等。」

二人は一齊に言へり、

「またも訪はせたまはんや。」

友は佇みて同情に堪へざるものゝ如く、目しひたる少女の顔をばしげ／＼とうち眺めて、

日八廿月一年一十正六
 濟定檢省部文
 書科教科語國校學女等高

訂五女子國語讀本 全十册

明明明明明明大大大大
 治治治治治治治治
 三三三三四四正正正正
 五五五五五五五五
 十十十十十十十十
 年年年年年年年年
 一三二二四八十七二十
 月月月月月月月月
 二二二二二二二二二
 三三三三三三三三三
 六六六六六六六六六
 初訂訂訂訂訂訂訂訂
 正正正正正正正正正
 版版版版版版版版版
 三三四五七九十九十
 行行行行行行行行行

大正十一年一月三十日訂正
 大正十一年一月十七日訂正

大正十一年一月三十日訂正
 大正十一年一月十七日訂正



定價
 卷一、二、三、四 各金參拾參錢
 卷五、六、七、八、九、十 各金參拾壹錢

著者	吉田彌平
同	小島政吉
同	篠田利英
同	岡田正美
發行所	東京市日本橋區本町三丁目十七番地 金港堂書籍株式會社
代表者	原亮一郎
印刷所	東京市芝區愛宕町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發賣所
 東京市日本橋區本町
 三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社
 各府縣特約販賣所

五訂女子國語讀本卷五

一三四

「然り、また來るべし。その時は貴女に何を教ふべき。」
 かくいひつゝ、われを顧みて、
 「いざ、急ぎ歸らん。忘れざるうちに今の曲を寫し置かん。」
 二人は見えずなるまでわれらが後影を見おくりぬ。われ
 らは足を早めぬ。かくて、彼は東の空の白みわたるまで我
 我としてその曲を寫しぬ。これぞ我人のさばかり親しめ
 る「月光の曲」の由來なりける。

訂五女子國語讀本卷五 終

